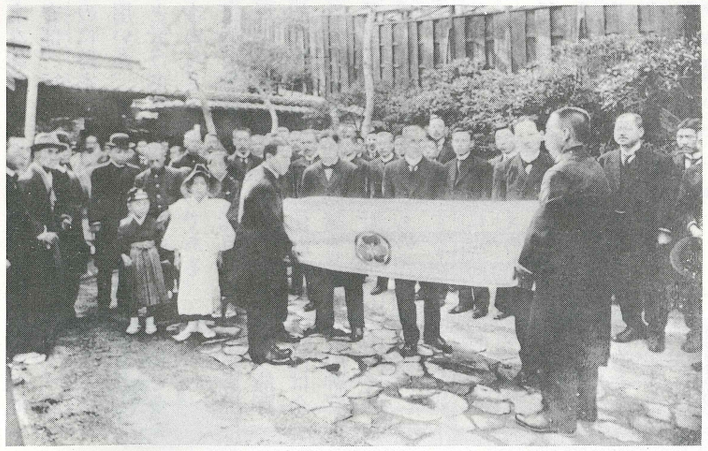
〝徳孤ならず〟

――頌徳碑にことよせて――

西川政一

辰巳会の方々、換言が許されるならば「鈴木の釜の飯を食った人々」が、その総会のよき日に、四十七才の若さで、而も僅か一ケ月の病臥でなくなった岳父西川文蔵を追慕せられて、まことに立派な「頌徳碑」を建立し、追慕の夢に美しい花を咲かせて下さったことは、私共遺族一同のこよなき感激でございます。

殊にゆかり多い神戸市の郊外六甲の地にある祥竜寺（そこには鈴木よね刀自を始め金子、柳田両先輩の碑が新しいものの来るのを待つかのように聳えて居る）の一角に、故人の生前何より好んでいた青竹に囲まれて立てられ、その孫の手によって除幕又、深き追慕の誠をこめて誠心誠意健筆を揮われた大幡久一さんの文字――すべてが極めて入念に取り運ばれたことを茲に再び深く感謝いたします。



因に、こゝにぜひ特記させて頂き度いことがあります。故人が幽明境を異にしてから後約一ケ年「俑竹余韻」なる追懐録を森衆郎氏の手で編纂して頂いたが、之を不幸私は戦災で全部焼失しました。然るに、幸なことにある特志家が東京池袋駅前の古本屋でこの本が陳列されているのを発見し、買求めて私に届けて頂いたのであります。茲にその写真をのせて読者諸氏にぜひ見て頂きたいのであります。

再拝。

日商岩井㈱

相談役

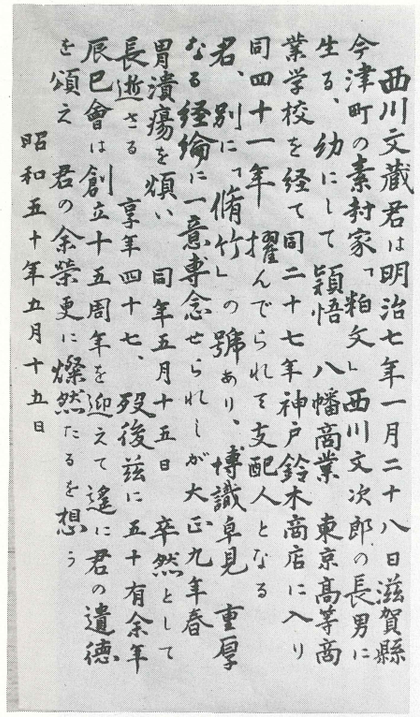
頌徳碑の碑文に就いて

大幡久一

一月の生田神社にての新年会の後の幹事会で碑文は岡清一さんに書いて戴くことになりました。同氏は西川さんの死去されるまで秘書をして居られ、椋野、松下さんと並んで鈴木の三筆といわれた方で大変結構なことと思って居りました。ところが三月二十三日御病気で御無理だと判り、仕方ないので翌二十四日に緊急幹事会を開いて代りの方を決めることに致しました。

当日の幹事会ではいろいろ意見も出ましたが、他人が書くよりも縁故のあるものが書いた方がよい。下手でもよいから幹事長であり実行委員長である君が書け、ということになり、仕方がないから御引受したような次第ですが、二十五日から東京に処用があって二十八日までは駄目なのです。

二十九日に木畑さんが用紙と筆と素晴らしい墨汁を届けて下さった。その中には字数を画した罫まで引いたものがあって、至れり尽せりでたゞ何もかも忘れて書く許りになっていました。それで二十九日から一日までの四日間はそれこそ一生懸命に謹書し最後に書いたのを四月二日の定例幹事会の時に提出しました。案外の好評を得、直に御影の石屋に届けて戴くことになりました。



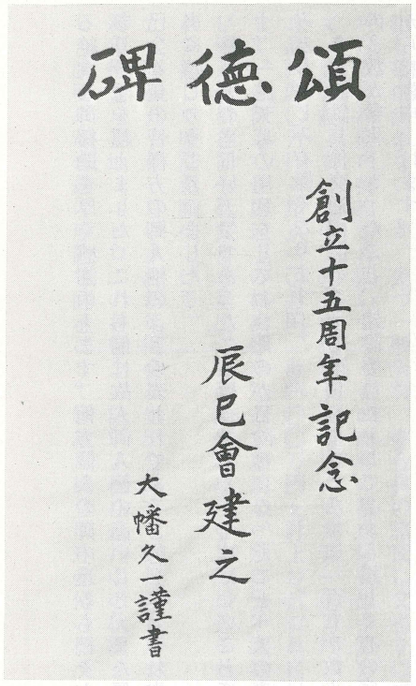
西川文蔵君は明治七年一月二十八日滋賀縣今津町の素封家「粕久」西川文次郎の長男に生る、幼にして頴悟八幡商業東京高等商業学校を経て同二十七年神戸鈴木商店に入り同四十一年擢んでられを支配人となる君、別に「俑竹」の號あり、博識卓見重厚なる経綸に一意専念せられしが大正九年春胃潰瘍を煩い同年五月十五日卒然として長逝さる享年四十七、歿後茲に五十有余年辰巳會は創立十五周年を迎えて遂に君の遺徳を頌え君の余榮更に燦然たるを想う

昭和五十年五月十五日

九日から一日までの四日間はそれこそ一生懸命に謹書し最後に書いたのを四月二日の定例幹事会の時に提出しました。案外の好評を得、直に御影の石屋に届けて戴くことになりました。

家に帰ると張りつめていた気の弛みの勢か腰に痛を感じ三・四日は大分悪かったが一週間位でよくなりました。考えてみるとこれは因縁というかお約束というか頼んで出来ることではないのでたゞただ有難い次第であります。

輸出部のシッピング係スペーサーをやっている時代、須原君（後の西川政一君）をそゝのかし支配人室からシガーを持出させ吸った前科があるので、西川さんがあの世からお前の書くのは当りまえ、罪ほろぼしのためだと言って居られるような気がしてなりません。同じ頃O・S・Kの大川平さんを招待したことがありますが、酒豪でコップでジャンケンで十杯位飲まされたことは覚えていますが、小用に立つとついて来た芸者が、後で反吐をはいている、それを看護しておるうちに自分も倒れたらしい。目が醒めて見るとその女と一室に寝ていたのでびっくりして本店に戻ったが、室中がぐるぐ〜廻り机についておれぬので、三階に上りベッドにもぐり込む。何だか騒がしいので目がさめた耳元へ「御苦労さん」と言われ行ってしまわれた。他の連中は叱られたのに私は何も言われなかった。招待簿でこんなことまでも知って居られるのかと感心させられたものだ。



もう一つは京城支店で沢村さんと話をしている時、本店焼打の電報が入った。直に帰ろうかと打電したところ「帰るに及ばず旅行を続けろ」と返事が来た。大連、青島、上海と廻り、一ケ月位して帰り、西川さんに大連の支店長は評判が悪いということも報告しました。あとで同僚から支配人の弟さんだと聞かされて驚いた位馬鹿者だったのに、其の後もよく目をかけて戴いて有難く思っています。

石油ショックのためいまだかって経験したことのない不況に陥りましたので、これでは大変だと思い建設予算の半額を日商、帝人、神鋼太陽の四社に御負担願う外なしと考えて、各社に五〇万円当御願いしました処、御快諾を得ましたので一安心致しました。本会に対する絶大な御援助を厚く感謝申上ます。他方個人の御申込みも続々と参り予想を超えました。これも偏に故人御人徳の高いこと、また辰巳会々員の皆様方の御人柄のよさの表われであると感ぜさせられ本当に嬉しゅうございました。

除幕式の当日好天気であったことは今でもとても喜ばしいことです。一応天幕の用意をしておいたのが日除けになったこと、天の恵みとしみじみ有難くなります。

また国鉄其他交通機関のストも前日に止んだために、百七十数人の多数が参列下さったこと、建設委員長として心から嬉しく心の底から感謝申上げます。

西川文蔵大先輩について

町永三郎（遺稿）

西川さんは私にとっては大恩人の一人であります。考えようによっては私の運命を転換させていただいた仁ともいい得るのでありますが、蓋し金子、西川の両大先輩は必しもピンからキリまで常に意見が一致していた名コンビではなかったかもしれません。しかし金子翁の長子が「文蔵」と命名されているのを見ると、この両雄の間には黙々のうちに肝胆相照らし、互いに双情相応ずるものがあり、暗々裡に一脈相通ずるものがあったのではあるまいかとも思われるのであります。

もっとも私としては入社以来常に格別のお世話に預り、且つまた非常な恩義を受けましたが、その中で最も深く感謝していることを申します。私は大正二年七月大阪高等工業学校機械科を卒業しました時、学校側から満鉄に就職するよう推薦されましたが、私は若い時からぜひとも将来鋳鋼業界の会社に入りたい希望を持っており、それが一貫した自分の生きるコースであると考え且つ確信していましたので、ほとんど決定しかかっていた満鉄の方をきっぱりと断わり、当時鈴木商店の支配人であった西川さんにお会いして、私の希望を縷述した上入社を懇請したのであります。ところが早速ご紹介状が効を奏し神戸製鋼所に簡単に就職することができ、そのお陰で及ばずながら爾後五十数年間にわたり日本鉄鋼業の発展に尽すことができるようになったのであります。

今からその当時を振り返って見ますと、まことに感慨無量なものを痛感いたします。西川さんはあらゆる点において当時の鈴木商店、ひいてはわが国の産業界にあってもその迫力は一きわ群を抜いて素晴らしいものがあり、またその人格識見も実に立派な英国紳士でありましたが、惜しいかな発展興隆の途上大正九年五月享年四十七歳の若さを以て早逝されたことは、ただに鈴木商店関係のみならず、わが国財界の一大損失であったことは申すまでもありません。私はご生前親しくお会いしたことはわずかの三回だけでありましたが、静かなること林のごとく、限りなき人間的な深さを感ずる典型的産業人であったと、今でも心からなつかしく思っております。

（神鋼元社長追憶の記から）

頌徳碑建設始末記

木畑龍治郎

一、昭和四十九年六月二日　本部月例幹事会の席上に於いて、予々懸案になって居た十五周年記念事業の実施について柳田義一氏提案の、「西川文蔵氏の頌徳碑」建設案が討議され、出席幹事全員の賛意を以て決定、実現に踏み切る事になる。

二、爾後数回の幹事会に於いて種々根廻わしの発言が活発に検討され、建設場所、形態規模、建設費、資金調達、等重要な項目に慎重な構想が纏まる。

三、八月二日　幹事会は有限会社御影石材店より工事見積書を接取、この工費総額二九〇万円の内訳を点検、九月二十四日（彼岸会当日）六甲祥龍寺へ参詣供養塔回向の後、寺院側と話し会い、了解を取り付け頌徳碑設置場所を視察決定、入山地積料金五十万円の約定を締結、幹事会、寺院、御影石材店の三者立会の上諸般の準備打ち合わせを取り定め、御影石材店へ正式発注を完了する。

四、十月　愈々実行の段階を目ざし改めて、委員会を構成、大幡氏を委員長に、柳田、畑、今村頼、松岡、嵯峨崎、小倉、木畑の諸氏を依嘱、東京支部より、斉藤、嶋内、福田、三氏の参加を懇請、東西連絡を呼応して着々実行を進める。

五、委員会はこれ等の間に参考資料として布引徳光院の碑石其の他を見学、材石の検分、祥龍寺へ地積料一部納入、御影石材店へ工事着手金交付等実務行動をする。

六、碑文作製は重要な項目に付き、東京西川家へも連絡、委員会へ一任するとの御了解を受け一同は「脩竹余韻」を基礎に参酌して起草にかゝる。

七、十月十五日　帝人ビルに於ける本部秋季例会の席上、大幡委員長及び委員各氏より本件の具体案を発表、会員諸氏の協力を懇請せし処、満堂の御賛意を得る。

八、十一月　愈々本案の最大課題とも云うべき資金調達について計画実行にかゝる。これの成果は本案達成の成否を左右するものであるから最も周到緻密に、そして大いなる努力を必要とするのは無論ではあるが何分にも深刻な不況の現下を考えるとき少からぬ不安を拒む事は出来ない。が、先づ一般会員、準会員の諸氏に文書を以て呼びかけ浄財の拠出をお願いする。この内容の重点は支出予算として、建設総工費二九〇万円、敷地料五〇万円、式典費一〇万円、記念品料四〇万円、諸式一〇万円、計四〇〇万円を計上し、これに対して、一口、二千円以上の拠出御申込みを懇請し、別に大手四社及び法人会員各社へも文書を呈出、東西両部幹事、並に委員等それぞれ分担して歴訪懇願申上げる。

九、昭和五十年一月の本部新年例会（生田会館）　同月の東京支部新年例会（築地スエヒロ）の各席上に於いて現在進行中の状況を詳しく説明、頌徳碑の形態を図示にして解説、拠金申込受付の状況に

ついては大手四社より各五〇万円宛計二〇〇万円の御受諾を得たる事と、法人会員一般会員準会員より約一六〇万円の御申出があり現在三六〇万円を受理（現金一部未入）目標額の九〇％に到達した事を中間報告、各方面の熱誠なる御支援を頂き予期以上の成績を得つつある事に深く感謝申上げる。

十、二月七日　委員会招集、大幡、柳田、木畑三氏提出の碑文原案を「たゝき台」に検討、三通の適所を綴り合せて作製、施工者と枠組みを打ち合わせ、愈々碑文の揮毫を岡清一氏にお願いする事を決める。

十一、二月十七日　柳田、木畑両名、神戸市宮地病院に入院加療中の岡清一氏を御見舞訪問、碑文の揮毫執筆をお願いしたる処御快諾を得たるも御退院後の御執筆を想い少からぬ責任を感じる。午後委員会招集、碑文の増補につき、高畑、永井、西川、嶋内各氏の申出字句意見を取り入れ再三再四訂正補正、続いて記念品調製については意見一致、三宮淡洲堂陶芸店へ、大幡氏以下六名品質検分に出張する。

十二、三月六日　東京支部幹事会（於日商岩井社友会室）へ大幡、柳田、木畑三名参加出席、午前中に西川支部長、大幡委員長の両氏会談、午後、碑文、記念品、募金状況等につき連絡会議、全国大会の下準備を打ち合わせる。

十三、四月二日　本部幹事会及び委員会々合、予々、岡清一氏に碑文揮毫を依頼し快諾を得たるも同氏は今尚入院加療中にて速かに退院を希望御予定を立てゝは居られるが、この御仕事は病後の同氏に重大な負担をお掛けする事は必定にて之では一同としても本意に悖る事少からず、茲に於いて一応御依頼申上げた事を拝辞して白紙に戻す事にし、改めて人選の結果、委員長大幡久一氏に執筆揮毫を依嘱する動議があり出席者全員一致を以て決定、お願いをする。

十四、四月七日　御影石材店社長森下氏に、大幡氏揮毫の碑文原寸書を手交する。

十五、五月二日　月例幹事会終了後、小野、大幡以下全員、御影石材店へ出向、碑石彫り上りを検分、祥龍寺へ行き、基礎「くづれ石垣積み」地盛り、植込み等視察、寺院側と五月十五日西川さんの御命日に全国大会除幕式挙行の趣旨を再度徹底して万端の下準備打合せを完了する。

十六、総括。斯くして昭和五十年五月十五日　頌徳碑は辰巳会全国大会に於いて、西川文蔵氏愛孫郁子嬢の手により華々しく幕を放たれその偉容を全辰巳会員の前に現わした。

全容は、基礎崩れ石垣積み高サ〇・九〇米、台座石高サ〇・七〇米、本体高サ一・九〇米、巾一・一〇米で総高サは三・五〇米である。

因に台石は六甲本御影自然石、本体竿石は仙台自然石である。

附記　右建設費収支　明細書　及び　基金拠出芳名録　は別表の通り　以上

（五月二十五日　記）

西川文蔵氏頌徳碑醸金芳名簿

50　口
松代和四郎

25　口
鈴木　正

20　口
多賀二夫

15　口
藤原廣義
松岡俊一
大幡久一
高畑誠一

150口
西川家

10　口
三浦平治
岡　清一
堀内宏展
藤原長司
長山泰憲
坂田重保
柏原　保
辻　良雄
楓　喜和恵

5　口
今村冬二郎
楠瀬せん
砂田義一
大野静江
柳田政江
柳田義一
嶋内義治
鈴木丸衛
宮口俊二郎
秋元鷹男
池田政雄
瀧上辯二
岩永英三
安東　浄
小野三郎
西川よし
谷喜久子
田中　清
小島　実
松本数英
柳田直子
安東幸子
小倉五郎
米田幸吉
藤田健作
池本慶一
宇津木亥一
石本喜久次
斎藤庸吉
瀬戸口又
山野上重喜
福原　剛
山崎敏明
畑　薫
嵯峨崎亨
木畑龍治郎
橋本知一郎
渋谷義雄
北浜　孝
安並正道
大澤紳吾
吉田秀太郎
三木秀介
小島輝次
久　琢磨
石阪慶一郎
永井幸太郎
山本勇治
遠藤亀三郎
村井順三
中井義雄
石野昔士郎
原　淳一郎
鈴木治雄
松下重男
幸松文太
松本得一
石谷金治郎
田代義雄
煙石隼人
松本　通
堀口正彦
伏見俊助
木村七郎
今村頼吉
樽谷勘三郎
坂本　寿
中村勇吉
福田秀吉
安田学石
田辺満寿子
佐々木義彦

3　口
柴田　忠
常深純一
井上函二
梶本百合
服部栄一
長谷川則文
東条順吉
益子洋一

小川多喜子
岡田猪太郎
石田テツ
下元健吉
浜中四郎
植木　寿
桜庭亥一郎
岩崎松喜
美濃島穎治
野島一郎
平高恭平

2.5口
藤内金次
田宮正遠
実　保二
藤田清俊

1.5口
長山峰松
萊崎　實
中島富見雄
渡利　宣

2　口
田中真一
小松豊秀
吉武政之
牧野豊二
大西田鶴子
川越孝教
金子孝蔵
長尾利三
鷲田　勇
中村宇兵衛
浅田幸吉
楠本直美
川村ひで
富田貴代子
長崎茂子
北村みつ
川口一郎
清木スミノ
松岡文子
細川翰吉
中川定子
内山耐子
西村君子
藤原勢次
加藤富男
松井タケヨ
難波寿一
伊藤ふみ
野並臣夫
田中千代野
河合一雄

中尾文策
柘植五百刀
梶川増太郎
大松チヨコ
蔵原惟門
辻村親信
室谷山水
島野能武雄
足立宇三郎
田中愛子
石田了三
内藤孝次
井筒栄助
廣井亀吉
原田廣治
福井さかえ
竹下富士松
貞広寿一

1　口
杉山平好
佐橋淳一郎
加藤　登
真鼻貞吉
冨永初造
毛受寛一
森下金吾
久保辰生
山中てる子
松本安蔵
金月　弘
西　茂
森田歳一
伊藤　勤
西野義人
竹村猪幸
村上愛治
竹岡年子
山崎安介
福澤有一
突永清人
阿部孫治
大竹三郎
後藤圭介
篠崎宰輔
楓　秀猪
中根芳子
大田キクヱ
篠原貞兼
建部朝子
笠松　雪
小樋井正夫
三宅徳三郎
城戸　陽
藤芳新吾
高橋八郎
菊池輝男
千頭元一
松田大介
松田　修
隅田まさ
源島ふさ
佐野寿夫
中村元義
下村幸男
塩谷房次
竹崎浅吉
幸泉　勲
荒木従縄
古出よね
山崎佳樹
久木元吉二
西川作蔵
芝　喜代二
谷山龍馬
北　保
阪倉卯三郎
四宮田幾蔵
町永ムラ
澤村初枝
奥平六朗
大津房太郎
請川　耿
坂本財地
宮本守恵
新海　元
池田文雄
三好軍次
村上孝造
山下慶一
福本三郎
池　武猪
小原恒太郎
廣野敬吾
下雅意亀吉
土肥尚太郎
間野玉枝
土居樟巳
長田喜代司
武内雪恵
宮永　勉
十河廣子
柘植宗俊
松本ぬい
越智　望
竹村豊太郎
杠　繁
久保勝資
坂本文子
木村真子
石田俊一
橋本時二郎
志水芳子
三崎鶴清
岩瀬聖一
福渡一雄
上野金治
中平武義
溝越祐一
木城真澄
久保庭早子
北尾千代
具嶋邦彦
山城卓爾
平佐喜美子
森本兎之助
曽根好雄
橋本　重
橋本賀一郎
末次孟義
米永一二

250　口
帝人㈱
日商岩井㈱
㈱神戸製鋼所
太陽鉱工㈱

15　口
日塩㈱
日輪ゴム工業㈱

10　口
東神興業㈱
日工㈱
帝人製機㈱
鈴木薄荷㈱

5　口
中央毛織㈱
東邦金属㈱

2.5口
神鋼電機㈱

2　口
新日本金属化学㈱

75　口
日本発条㈱

25　口
日本精化㈱